

平^へ暮^ぼ句集

近澤^{ちやつぶ}茶風

李あり果樹園わたる風ゆたか

水遣りは蚊遣火と行く眠き朝

七七日なすべきことの多き梅雨

凌霄花^{のうぜんか}散りたる道の賑々し

生き残りゆうゆう一尾大金魚

短夜や洗濯機には糸のくず

朝曇り味付け忘れし卵焼き

冷房の過ぎたるカフェやホットラテ

目覚ましは蝉よ青空ひかり満つ

昼の子ら寿命を知らず蝉を和え

足出せば進む家路や炎天下

草も木も吾も封じたる西日かな

ドア全開路側の緑陰ひとり占め

パリ五輪ニュース横目の冷素麺

患いの思い出ばかり初盃蘭盆

法要の最中の地震蚯蚓なく

秋暑し顔むくんだと言われけり

コンクリの庭に一鉢芭蕉かな

納骨の供花の風消ゆ秋の空

降れよ降れ稲の切り株草新た

「太陽がいっぱい」おいて秋に逝く

ため息の行方や秋の空深し

秋晴れの下アスファルトに沈む^{もと}身体

初めてのチャージ葡萄の粒太し

雨もよう果てゆく里の曼珠沙華

百舌の声消ゆ伐採の売り地かな

秋宵の街銀幕の余韻かな

猪の街に出でしぞ秋暑し

月へ月へと清澄のジャズペット

柿の朱^{しゅ}を嘴^{くち}に烏の迫り来る

デ・キリコ展憂愁よりも俳味かな

つっかけの素足のゴミ出し冬の虹

隣国の市民は強し実南天

月並みの句さえ浮かばぬ師走かな

忘れしスイッチ冷たきカーペット

日曜日関係ないね白い息

冬晴れに金の目陰し黒猫よ

忘年会甥は新型コロナなり

雑木切る三きょうだいの二日かな

休診の張り紙を背に北風へ

竿の端に乾しもの白し冬の星

冬の道ドンキホーテの現るる

大寒やぽつんと空の貯金箱

昼飲みの話は転がり夕時雨

足の爪剥るる朝や冴え返る

枝先の拍手喝采白木蓮

雨降って火は収まりぬ春の山

蒲公英やくるり半坪ぽかぽかと

側溝から覗く緑や風ひかる

一つ抜けば次が目につく春の草

花筏小人となりて漕いでみし

遠山のむらさき探す藤ざかり

梅雨入りや自業自得の松葉杖

松葉杖に慣れて映画ぞ夏の空

平暮句集

二〇二四年六月から二〇二五年六月までの五十一句と昔の三句

発行 二〇二五年六月二十五日

著者 近澤茶風

発行所 綿雲堂

非売品